

〔資質・能力〕論の反学問性 第34回

新学習指導要領等は、①何ができるようにするか、②何を学ぶか、③どのように学ぶか、が3つの柱で、この①が「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」で、〈資質・能力〉が全体の土台となった。①はさらに、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性」の3つに分けられている。知識と技能はひとくくりにできるのか、思考力と判断力と表現力はどう関係し合っているのか、学びに向かう力とはどういう力か、学問的検討がされた形跡がない。学習指導要領本文になると、作文した人自身も理解しているか疑わしい、意味のとりにくい文章になっている。教育学・哲学では、アリストテレス以来、能力は、テオリア・プラクシス・ポイエシスと、対象のちがいによって3つに整理されてきた。これら先行研究への対応がない。

心理学では、様々な能力をどう取り出すかの研究と同時に、それぞれの能力を発達的にとらえてきた。



幼稚園との連続性の強調があるのに、教科をこえて、年齢ごと・能力ごとにまとめた上での経年的変化の把握がされていない。

統計学では、能力概念に統計的データの裏づけが必要だが、それが無い。因子間の相関関係の分析・考察もない。一番影響する因子が隠れている場合もある(文献①、106頁)。ある能力をつけることが全体の實力を落とすこともあり得る。

マネジメント的には、フィギュアスケートの新採点方式(2004年から)などの評価の知識を活用しているのか。採点方式にあわず引退した人もいる(文献②21頁)。

土台がここまでおかしいと、「砂上の楼閣」という言葉が浮かぶ。子どもたちは学校を引退できない。(研究部・加藤聡一)

参考文献

- ①豊田秀樹他『原因をさぐる統計学』(ブルーバックス) 講談社、1992年。
- ②荒川静香『フィギュアスケートを100倍楽しく見る方法』講談社、2009年。